

同志社大学一神教学際研究センター

日本オリエント学会 共催

公開講演会

古代エジプトと聖書
——知恵文学の比較を中心として——

● 講 師 ●
かつ むら ひろ や
勝 村 弘 也

(神戸松蔭女子学院大学文学部教授)

● 日 時 ●

6 月 10 日 (土) 午後 2 時～4 時

● 場 所 ●

同志社大学 今出川校地 神学館礼拝堂

○入場無料・事前申込不要

○問い合わせ

同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

TEL. 075-251-3972 E-mail: staff@cismor.jp HP: <http://www.cismor.jp/>

～プログラム～

1) あいさつ 上岡弘二（日本オリエント学会会長）

2) 講演 勝村弘也（神戸松蔭女子学院文学部教授）

「古代エジプトと聖書——知恵文学の比較を中心として」

3) 質疑応答 司会 越後屋 朗（同志社大学神学部教授）

4) あいさつ 越後屋 朗

～講師紹介～

■ 勝村弘也（かつむら ひろや）

1946年兵庫県に生まれる。京都大学大学院文学研究科（キリスト教学専攻）博士課程単位取得退学、ハイデルベルク大学神学部留学、現在は、神戸松蔭女子学院大学文学部教授。主な著書：『詩篇注解』『旧約聖書に学ぶ』（日本キリスト教団出版局）。『ユダヤの知恵 箴言カレンダー』（聖公会出版）。主な翻訳書：G・フォン・ラート著『イスラエルの知恵』（日本キリスト教団出版局）、「箴言」『ヨブ記 箴言』（岩波書店）所収。専門分野は、旧約聖書の特に関心知恵文学である。

～講演概要～

1. はじめに

近年、わが国において一種のエジプト・ブームとでも言うべき現象が起こっている。このことは古代エジプト関係の大量の出版物によって確認される。古代エジプト文明への高い関心は、我が国だけの特殊な現象ではない。エジプト文明の再評価に関連して、欧米ではエジプト学の研究成果が従来とは違った形で確実に旧約研究に影響を与えている。

2. 聖書においてエジプトはどのように見られているか

従来、聖書、特に旧約は全体として「反エジプト的」な書物であると考えられてきた。例えば、マックス・ヴェーバー著『古代ユダヤ教』は、出エジプトを決定的な歴史的出来事であるとして旧約の中心に置く。また、旧約の代表的な預言者のことばから「反エジプト的」な発言を探すのは容易である（例えばイザヤ書 18-19 章、30-31 章など）。しかしながら、列王記のソロモン王に関する記述には、エジプトとの政治的文化的交流を評価する見方も存在している。出エジプト物語においては、エジプトが経済的には豊かであっても、パロが人民を抑圧する「奴隷の国」であるとしてマイナスに評価されていることは確かである。預言者の発言は、前 8—6 世紀の世界情勢を冷静に見れば十分に理解出来るものであって、原理的な意味で「反エジプト的」とすることは出来ない。

3. 古代イスラエルはエジプト文化の強い影響下にあった

少なくとも「聖書時代」以前にカナンのが、エジプトの強い政治的文化的影響下に置かれていたことは否定出来ない。王国成立後もソロモンに関する物語が示しているようにエジプトとの交流は盛んであった。官僚制度がユダ王国において確立されたのは、いつ頃なのか。また官僚の養成に不可欠と思われる「学校」が王国時代に存在したのか。これらについて確実なことは言えない。しかし、王国の記録は書記の存在なしには考えられないし、書記の養成には何らかの教育機関が存在し、その教育にエジプト的な知恵の伝統が関係したのは当然であろう。旧約に対するエジプト文化の影響に関しては、近年さまざまな角度からの考察が試みられている。以下にこのような研究の成果を簡単に紹介したい。

(1) 図像学的研究

エジプトに限らず、イスラエルの周辺世界の図像に関する研究が、旧約研究に豊富な材料を提供している。20 世紀の初めに宗教史学派のグレスマンが作った「カタログ」が長く使われてきたが、近年の Othmar Keel の研究はこれをはるかに凌駕している。

特に各地の図像やエジプトの恋愛詩を参照したケールの雅歌解釈は、画期的な業績と言える。なお、拙訳の雅歌（岩波書店刊行の『旧約聖書 XIII』所収）は、ケールの研究を強く反映している。

(2) 箴言 22 章 1-7 節以下と「アメンエムオペトの教訓」との関係

1924 年にエジプト学者の A・エルマンが両者のほとんど逐語的な対応関係を指摘した。従来は、「アメンエムオペトの教訓」の成立年代を確定出来ないことから、エジプトの知恵が聖書の箴言に影響を与えたとは断定出来ないとされてきた（筑摩世界文学大系 1『古代オリエント集』の該当箇所を参照）。しかしながら、箴言中の格言には、この箇所に限らずエジプトの教訓文学との並行が指摘される箇所が他にもあるし（例えば箴言 16 章 1 節以下）、箴言 23 章 1-3 節の場合は「アメンエムオペトの教訓」だけではなく「宰相プタハホテプの教訓」にも類似した箇所が認められる。やはりエジプトの知恵文学が箴言に影響を与えたと考えるのが妥当であろう。拙訳の「箴言」（岩波書店刊行の『旧約聖書 XII』所収）は、このような立場をとっている。なお、エジプトの知恵文学が、「神（ネチェル）」について語っていることは注目に値する（パスカル流に言えば「哲学者の神」）。

(3) 知恵的とされる語彙に関する研究

Nili Schupak, *Where can Wisdom be found?* (1993) は、エジプト語とヘブライ語の知恵的語彙を比較した研究であって高く評価される。エジプトの格言は、箴言に強い影響を与えていることが確認される。

（４）ヤン・アスマンの「マアト」研究が提起した問題

エジプト学者 J・アスマンによる「マアト」研究は、古代エジプトの官僚たちの思考世界を驚くべき仕方では解明した。Jan Assmann, Ma'at, C.H.Beck (1995²)。エジプト古王国の崩壊は、あらゆる領域におけるマアト（秩序、正義、真理）の支配に関する問題を顕在化させることになった。中王国時代の文学は、マアトが支配しているとはどういうことなのか、ひとがマアトに適った行動をとる、あるいはとらないとはどのようなことなのかを論じる。

* 「オアシスの男の嘆き」におけるマアト論：

写本 Berliner Papyrus 10499 は、1899 年ラメッセウム領内の第 13 王朝時代の或る墓で発見された。この墓の主は、医者、魔術師であった。物語は、謀略によって積み荷を奪われたオアシスの男が、宮廷人のレンシに訴える場面が中心になっている。弁論の中で男はくマアトに適った行動の反対像を雄弁に描き出す。アスマンは古代エジプトに特徴的な「相互連帯的正義 (iustitia connectiva)」の概念を、以下のくマアトに反する 3 つの罪を典拠にして説明している。

- a) 怠慢な者には、昨日がない。
- b) マアトに耳を閉ざす者には、友がない。
- c) 食欲な者には、祭りが無い。

a) 怠慢な者は、今日と結びついている昨日のことを忘れている。訴えを聞かない役人の不作為は、現実の連続性を破壊する。「責任ある立場にいる者が、不義・不正に対して適切に対処しないなら共犯者になる」との主張がそこにはある。エジプト人は、社会的記憶を大切に。「よい行いは、昨日の場所に戻ってくる」とも言われる。

b) 交流的連帯・互惠性としてのマアト：社会的な役割分担の枠のなかでく聞いて理解するくという義務を果たすか否かが問われている。

c) ここでは「心臓」が問題になっている。連帯への意欲の逆が「食欲」である。これは、人格、共同体、時を破壊する。

アスマンの研究は、クラウス・コッホが提起した旧約の「応報 (Vergeltung)」に関する議論に決定的な意味をもった。エジプトでも「行為者に行為が返る」ことが説かれる。このような行為と結果の連関は、マアトが支配している世界（つまり「社会状態」）で起こる。古代エジプトにおいては、応報は非人格的な世界秩序に根拠を持つのではなく、文明社会における人々の相互行為によって基礎づけられる。

（５）「死者の書」と旧約聖書

「死者の書」の中で最も有名なものが、第 125 章のく否定告白の場面である。

「私は、不正を行なったことはない」「私は、掠奪をしたことはない」「私は、食欲だったことはない」「私は、何も横領したことはない」「私は、他人を殺害したことはない」「私は、不正な榼を使ったことはない」「私は、まがったことをしたことはない」「私は、神のものを横領したことはない」「私は、嘘をついたことはない」「私は、食物を盗んだことはない」「私は、他人を罵ったことはない」「私は、攻撃的だったことはない」「私は、神の家畜を殺したことはない」などなどと、死者は 42 の神々の前で長い告白を唱える。このようなマアトの審理において重要なのは、官僚の「業績」のようなものではない。

このような告白は、古代イスラエルにおいて聖域に入る時に唱えられたとされる告白と比較することが出来る（詩篇 15 篇、24 篇参照）。

宗教（祭儀）と倫理との強い結合は、イスラエルの預言者によって突然主張されるようになったのではない。はるかに昔の古代エジプトの呪文（此岸から彼岸に入るときに唱えられる呪文）には、すでに宗教と倫理の結合が見られるのである。